



神奈川の風



平成27年9月7日号

校長 吉江 明洋

< 子どもを育てるには >

川崎や大阪での中学生の痛ましい事件以来、家庭や家族関係の在り方が様々に報道されています。学校でも、どのような指導が必要か悩むところですが、今回は、小笠原流礼法総師範でもある柴崎直人さんが、以前、新聞のコラムに書かれた文章の一部を紹介します。

幼児教育での大人の姿勢の重要性を説いていますが、年齢的なレベルの違いはあれ、中学生教育にもまだまだ当てはまることはありそうな気がします。



家庭や学校教育の不備による「教育不全症候群」の患者に育つ原因とは何でしょう。それは「自分は愛されていない」と子どもが感じる「環境」なのです。

わがままではない自分の意志が周囲に受け入れてもらえない「自分は評価されない、自分の居場所（心の居場所）がない」と常に感じるような環境に育つと、他者に対しても愛情をそそがなくなり、他をつまらない存在だと軽視し、ないがしろにするようになります。

つまり傍若無人に振る舞うトラブルメーカーになります。そのような子にならないためのコツは「視線を合わせて言葉かけを繰り返すこと」。正しい大人の言葉で、一日に十回でも二十回でも「大好きだよ」の心を伝えるのです。これを毎日毎日繰り返すのです。

愛情不足と同様にマズイものは、「社会の秩序を守らないような子に育てる大人の態度」です。例えば、1. 約束を破る、2. 例外を作る、この二つです。

「もう二度とお菓子なんか買ってあげないっ！」と絶叫しておきながら、翌日には買い与えてしまう。「赤信号は渡っちゃダメッ！」と教えておいて、一方では「それっ、今だ。渡っちゃえっ！なにノロノロしてんのもオ」などと矛盾した言動を繰り返す…。等々

自分の体の外側に別の価値観と規範が存在し、人はそれにのっかって生きねばならないという「気づき」を、大人の無原則な行為が引き起こす混乱によって気づけなかった子は、集団のルールを平然と破る人間に成長する可能性がきわめて大きいのです。



これ以外にも、グズグズする子どもに負けて「言うことを聞けばこうしてあげる…」などの交換条件を常に与えて子どもを育てていると、将来、大きな弊害がおこりそうです。目標達成のご褒美は時として有効ではありますが、毎回、最初から交換条件を出して仕向けても、自分に都合良く甘えるだけで身につかないということでしょうか。

各ご家庭とともに、学校も日常の教育活動を振り返りながら、子どもたちの規範意識を高め、「自分は愛されている」「自分は家庭でも学校でもかけがえのない存在である」「自分はみんなから必要とされている」などの自己肯定感や、自己有用感を感じ、自分に自信を持って前向きに生きていくことのできる生徒を育てていきたいと考えています。